

## [講演要旨] 『玄与日記』に記された文禄五年(1596)豊後地震による 周防国上関の津波被害

松岡祐也・今村文彦(東北大学大学院工学研究科)・都司嘉宣(東京大学地震研究所)

### § 1. はじめに～豊後地震津波の問題点

豊後地震は、瓜生島が津波によって消滅したという伝説で知られている。瓜生島の存在を伝える史料は江戸中期以降のものであり、その存在自体は伝説であるものの、豊後国府内(大分市)を津波が襲ったことは確実であるとされる。しかしその一方で、確実な同時代文献がきわめて少ないことが問題となっている。

今回は、同時代史料の中で豊後地震津波の存在を証明できるものを利用し、豊後地震津波による被害状況を示そうと思う。

### § 2. 『玄与日記』について

今回、特に注目するのは『玄与日記』である。著者は阿蘇大宮司の子である阿蘇惟賢(出家して玄与入道黒斎と号す)とされ、彼は当時薩摩(鹿児島県)の島津家に仕えていた。この日記は、文禄五年(1596)に鹿児島から京都へ戻る前左大臣・近衛信輔(後に信尹)に随従した際、その道中を記したものである。

玄与黒斎は歌人として島津家に仕えていたらしく、日記中にも各所で行われた連歌会で詠まれた歌が数多く記されている。このことから、『玄与日記』は近世初期の文学史上で注目されている。

### § 3. 豊後地震の発生日

豊後地震の発生日については、閏七月九日・十二日・十三日の三説がある。そのうち九日説については、同時代史料で九日に大地震があったと記しているものが根拠となっている。

一方で、十二日・十三日説は、これまで江戸中期以降の文献が根拠となっていた。しかし他の同時代史料を当たった所、藤原惺窩(当時鹿児島に滞在)の著作『南航日記残簡』に、そのいずれの日にも鹿児島で有感地震があったとの記事があった。各日の表現は異なり、九日は「地震」、十二日は「大地震(中略)夜又地震」、十三日は「大地震」とする。『玄与日記』では「去七月十二日地震之時」と記している(七月は閏七月の誤りと考えられる)。

以上を総合すると、豊後地震の本震は十二日に起きたのではないかと考えられる。

### § 4. 上関の被害記録

この『玄与日記』中には、豊後地震津波による周防国上関の被害が記されている。これは、玄与黒斎が京都への道中に立ち寄った豊後国佐賀関(大分市)で、津波後 21～25 日目に聞いた話を書き留めたものである。玄与黒斎は「去七月十二日地震之時、かみの関と申す浦里は、大波にひかれて家かまともなし、いのちをうしなふもの数をしらす、哀なる事ともなり」と記している。

この記事が注目されるのは、同時代文献で、しかも別府湾岸以外の被害を記している点である。これまで知られていた同時代文献であるルイス・フロイスの『年報補遺』では、津波被害は現大分県域のものが記されているのみであった。『玄与日記』は一部に存在が知られていたものの、被害記事はそれほど注目されていなかった。この記事によって、豊後地震津波が広域に渡る被害を及ぼす災害であったことが明らかとなるのである。

### § 5. その他の地震記事

周防国上関の他に、『玄与日記』には被害を示す記事は見あたらない。だが、玄与黒斎が豊後地震を経験していたことを表わしている記事が存在する。八月十八日、無事大阪へ着いた玄与黒斎はその道中について「地震の折節、海上は波高く風も激しかったが、無事でいられたのは、仏神がお守りくださったからだ」と記している。

また、地震記事ではないものの、地震と誤りのような記事も存在する。九月十三日、近江国三井寺(園城寺、大津市)を訪れた際に「三井寺坊舎皆々くつはて…」と記している。しかし、これは文禄四年(1595)に破却されたための荒廃であり、地震とは全く関係がない。